若松開拓記念碑

北海道庁長官正四位勲二等　佐上　信一　題額

開拓は百年の計なり、荒廃を変じて良田と為し狸棲を化して人寰と成す、豈、容易業ならんや、明治二十九年、会津若松の人高瀬喜左衛門、林　賢蔵、石山源太郎、福田宣平、石堂留吉、大須賀善吉、五十嵐惣吾、穴澤祐造の八氏相謀り、植民組合を組織し七月、未開地五百町歩の貸付許可を得て開墾の事を創む、九月組合主任　穴澤祐造氏、農場管理者　笹原倉次郎氏等渡道す。当時、密林天を蔽い、荊棘地を塞ぎ、孤途熊径錯綜せり。十月測量の際たまたま巨樹オンコの雌雄を発見して、みおやのまつ（祖松）と名づけその地を若松と称す。翌三十年四月、第一次移民十一戸各所に茅屋を営み耘耔に従事す。榛を除き莽を芟り、具に苦楚を嘗め頗る惨怛に堪ふ、爾来幾星霜神社を奠め寺院を建て、吉武是正師入りて布教に任ずる等苦心到らざるなし、斯くて小学校、報徳社布教所、其の他各般の施設なり、現戸数百二十二開きたる土地一千五百町歩の内、百十町歩を開墾者に分譲して農家の基礎を鞏固にし、逐日隆盛の機運に向かい、今や美田穣々炊煙靄々住民鼓腹撃壤す。噫快なる哉、顧みて惟ふに今日ある蓋し故穴澤祐造氏の功最も大なり。當時外は熊羆蝮蛇の害を防ぎ、内は人心の統一に努め、或いは死線を越えて奮闘し、或いは牧畜蚕業を興し、水田を計画して永遠に福祉の基を立てたり、古語に曰く、人定まって亦能く天に勝つと、氏の如きは能く自然を征服せし人と謂うべし、併記して以って後毘に伝うと云爾。

昭和九年五月吉辰

會　津　　佐治　勇平　撰

仙台正六位勲六等　　四竈　仁邇　書

（これは碑文の原文そのままを写したものであるが一部ルビを記載し、また改行箇所は実物と異なる。）

この記念碑は、当初建立した場所から移し、人目につきやすい国道に面した法覚寺の入り口の門と並べて建てられている。